

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-2

1980

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-2

1980

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
7627

はじめに

県下のは場整備事業にともなう埋蔵文化財の発掘調査も、はや八年目を迎え、ますます工事側と調査側の調整が困難をきわめること再々となっている。

本書はこの困難さのなかでも、特に人材と時間の不足に反して、激増する調査資料を公開すべくまとめたもので、古代近江を考えるうえで新たな知見が数多く明らかにされている。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和56年3月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本報告書は、昭和55年度国庫補助事業の対象となった団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。
2. 本書には、湖北地方の次の4遺跡を収載した。
 - 坂田郡山東町御墓遺跡
 - 〃　伊吹町神ノ木塚遺跡
 - 〃　米原町塚原古墳
 - 〃　　〃　三大寺遺跡
3. 調査、および整理、報告には、滋賀県教育委員会 文化財保護課 技師 田中勝弘が担当した。
4. 現地調査や整理作業等に御協力していただいた調査員、補助員等は各本文中に記載した。
5. 本書は、田中勝弘が執筆し、図版等の作成は調査員、補助員との協同作業による。

目 次

I . 坂田郡山東町御墓遺跡	2
1. はじめに.....	2
2. 調査の経過.....	2
3. 調査の結果.....	2
4. 遺 物.....	4
5. おわりに.....	6
II . 坂田郡伊吹町神ノ木塚遺跡	7
1. はじめに.....	7
2. 調査の経過.....	7
3. 調査の結果.....	7
4. 遺 物.....	10
5. おわりに.....	11
III . 坂田郡米原町塚原古墳	12
1. はじめに.....	12
2. 位置と環境.....	12
3. 調査の経過.....	12
4. 調査の結果.....	16
5. おわりに.....	19
IV . 坂田郡米原町三大寺遺跡	20
1. はじめに.....	20
2. 位置と環境.....	20
3. 調査の経過.....	20
4. 調査の結果.....	22
5. 遺 物.....	23
6. おわりに.....	24

図版目次

- 図版一（御墓）（上）御墓遺跡遠景（東より）
（下）トレンチ g・f・c
- 図版二（御墓）（上）トレンチ p・o
（下）トレンチN断面土層
- 図版三（御墓）（上）トレンチ q 断面土層
（下）トレンチ q 遺物（土師器皿）
出土状態
- 図版四（御墓）（上）出土土師器（甕等）
（下）出土土師器（杯類）
- 図版五（御墓）（上）出土須恵器（杯・蓋・壺等）
（下）出土土師器（甕・杯等）
- 図版六（神ノ木塚）（下）神ノ木塚遺跡遠景
（下）神ノ木塚遺跡近景
- 図版七（神ノ木塚）（上）発掘後全景
（下）土塙断面
- 図版八（神ノ木塚）（上）土塙
（下）土塙断面近景
- 図版九（神ノ木塚）（上）玉砂利除去後の土塙
（下）玉砂利除去後の土塙
- 図版一〇（塚原）（上）塚原古墳遠景（南東より）
（下）塚原古墳遠景（北西より）
- 図版一一（塚原）（上）石室近景（南西より）
（下）石室近景（南東より）
- 図版一二（塚原）（上）石室、玄門部
（下）石室、玄室（東より）
- 図版一三（塚原）（上）石室、漢道東壁
図版一四（塚原）（上）石室、奥壁
（下）石室、漢道東壁
- 図版一五（塚原）（上）石室、漢道西壁
（下）漢道部遺物出土状態
- 図版一六（塚原）塚原古墳出土須恵器、軒瓦・三大寺
遺跡出土瓦及び土器類
- 図版一七（塚原）（上）塚原古墳出土平瓦（タキ痕A）
（下）塚原古墳出土平瓦（タキ痕B）
- 図版一八（塚原）（上）塚原古墳出土平瓦（タキ痕A、
B、C）
（下）塚原古墳出土須恵器類
- 図版一九（三大寺）（上）三大寺遺跡遠景（西より）
（下）三大寺遺跡近景（西より）
- 図版二〇（三大寺）（上）Bトレンチ
（下）Cトレンチ
- 図版二一（三大寺）（上）Hトレンチ
（下）Hトレンチ深掘断面土層
- 図版二二（三大寺）（上）Iトレンチ
（下）Jトレンチ
- 図版二三（三大寺）（上）Nトレンチ
（下）Pトレンチ

挿 図 目 次

図1. 遺跡位置図.....	1
図2. 御墓遺跡附近地形図及びトレンチ配置図.....	3
図3. 御墓遺跡トレンチ断面土層図.....	4
図4. 御墓遺跡出土遺物実測図.....	5
図5. 神ノ木塚遺跡周辺地形図.....	9
図6. 神ノ木塚遺跡地形測量図.....	9
図7. 神ノ木塚遺跡断面土層図及び土竪実測図.....	10
図8. 神ノ木塚遺跡出土土師器皿.....	10
図9. 神ノ木塚遺跡出土五輪塔.....	11
図10. 塚原古墳附近地形図.....	13
図11. 塚原古墳地形測量図.....	14
図12. 塚原古墳横穴式石室実測図.....	15
図13. 塚原古墳出土遺物実測図（1）.....	17
図14. 塚原古墳出土遺物実測図及び拓影（2）.....	18
図15. 三大寺遺跡地形図及びトレンチ配置図.....	21
図16. 三大寺遺跡トレンチ遺構測量図及び断面土層図.....	22
図17. 三大寺遺跡出土遺物実測図及び拓影.....	23



図1 遺跡位置図
(A:御墓遺跡, B:神ノ木塚遺跡, C:塚原古墳, D:三大寺遺跡)

I 坂田郡山東町御墓遺跡

1はじめに(図1)

本報告書は、坂田郡山東町大須地区の団体営ほ場整備事業に伴う事前調査の成果である。本調査は、国庫補助事業として、1,200,000円を費やし、滋賀県が、財團法人 滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。調査及び整理業務には、滋賀県教育委員会 文化財保護課 技師 田中勝弘が指導に当り、以下の参加者の協力を得た。

田中秀和、田中聰一、石本好典、藤井益夫、北脇泰久、岸本好弘、飯塙哲夫、平通茂、児玉治美、菊池久美、青木千枝、宇田川正樹、多賀健次、大内裕子。

なお、本報告書は、本文を田中勝弘が執筆し、製図、作図、図版の作成等については、上記の参加者の協同作業によるものである。

2 調査の経過(図2)

調査の対象地域は、ほ場整備工事の大須地区の北半部であって、西大野木と東大野木の両集落にはさまれた約100,000m²である。この附近は、標高162～169mにあって、南西方向に張り出した台地を形成している。以前、この台地の南西端、西大野木の集落を通過する県道の改良工事の際に、石礫が数点出土したことが伝えられ、当附近が御墓遺跡として周知されるようになった。しかるに、このたび、当遺跡地を含んでは場整備工事が計画されることになった。このことに伴い、現地を再踏査したが、この結果、今回調査対象範囲としたほぼ中央、小字御墓附近で須恵器、灰釉陶器等の小片を探集し、弥生時代の他古墳時代～平安時代の集落跡の存在する可能性が考えられた。従って、地元との協議の結果、ほ場整備工事計画により、田面の切り下げ及び排水路の敷設が予定されている部分を中心にトレンチを設定し、遺構、遺物包含層等の有無を確認し、遺跡の性格を追求することとした。

3 調査の結果(図3)

44ヶ所にトレンチを設定し、遺構の追求をはかったが、結果的には、gトレンチで、耕作土の床土層から土器片を採取し、また、qトレンチで、平安時代の土塁一基を検出したのにとどまった。

以下では、調査対象地域を東西に横断するA・D・H・K・L・N・gトレンチ、南北に縦断するG₂・G₁・P・mトレンチの断面土層の観察結果を記述し、他のトレンチの観察記録にかえたい。

Aトレンチ 厚さ約30cmの耕土及び床土の下面は直ちに黄褐色砂礫の地山に移行する。構造的堀り込みがあつたが、床土層を切り込んでおり、後世の被掘溝である。

Dトレンチ 耕土・床土層と地山層との間に、厚さ約10cm程の黒褐色土層が見られたが、遺物は含まれておらず、また、遺構は検出できなかった。

Hトレンチ ここでもDトレンチと同様の堆積層を示していたが、黒褐色土層は厚さ25cm程と厚くなっている。ただ、Dトレンチよりも礫を多量に含んでいた。

Kトレンチ 耕土・床土・黒褐色土・黄褐色砂礫と順次移行する。黒褐色土層は厚さ約15cmで、やはり遺物

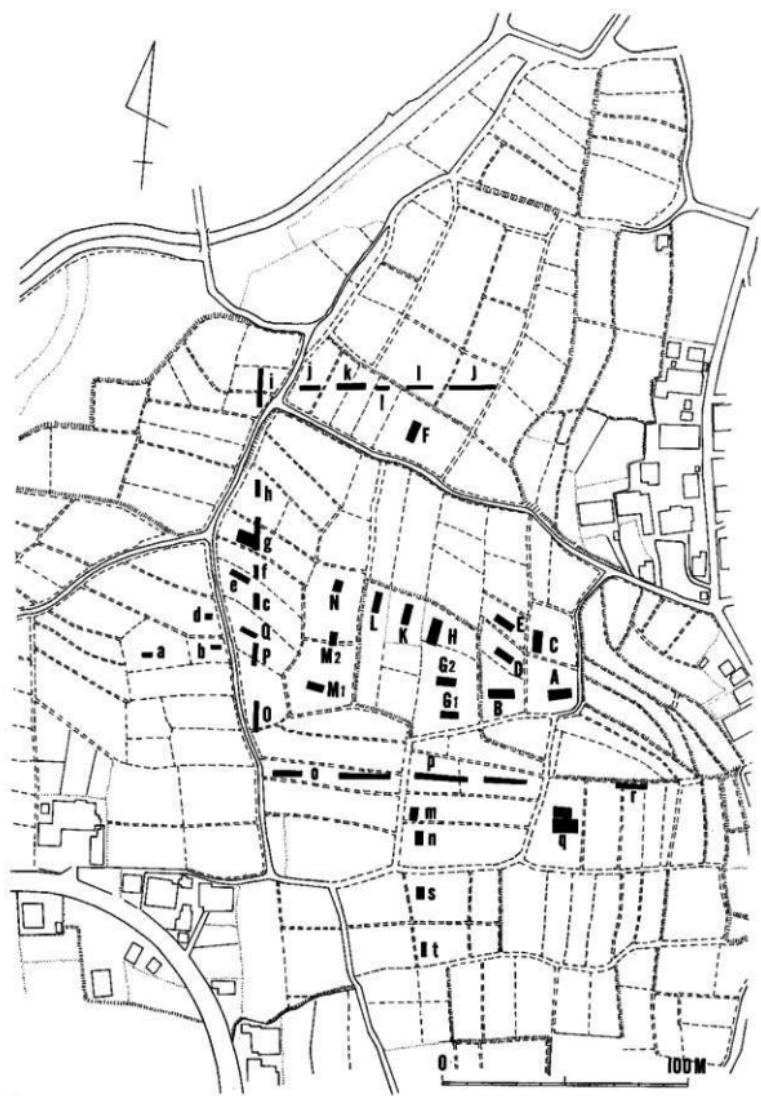


図2 御墓遺跡附近地形図及びトレンチ配置図

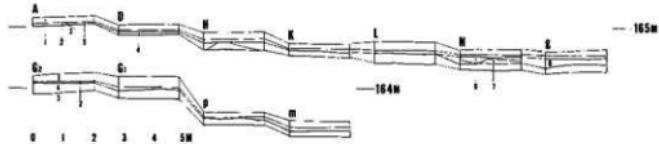


図3 御菟遺跡トレンチ断面土層図(アルファベットはトレンチ名)

(1. 黒土、2. 床土、3. 黒褐色土層、4. 黄褐色砂礫層、5. 塗褐色土層)
(6. 黑褐色砂礫層、7. 暗褐色砂礫層)

を含まず、遺構も検出できない。

Lトレンチ 層序に変化はないが、黒褐色土層は約35cmと厚味を増している。

Nトレンチ 地山直上の黒褐色土層は厚さ20cm程とLトレンチより薄くなるが、この上面、床土との間に、厚さ20cmにわたる黒褐色乃至暗黄褐色の砂礫層が新たに堆積していた。しかし、いずれも遺物は採取できず、遺構を検出することはできなかった。

gトレンチ ここでも、黒褐色土層は厚さ20cmと変わらず、この上面に、厚さ20cmにわたって、下層の黒褐色土層よりやや茶色味を帯びた堆積層がある。この土層の上面で土師器の細片が数点出土したが、土甌等の遺構はなく、また、土層中には遺物は皆無であった。

G₂・G₁トレンチ ともに、地山と床土との間に厚さ35cmの黒褐色土層の堆積が見られた。このトレンチの位置は、最も多くの土器片を表探し得た個所であるが、堆積土層中には遺物は含まれておらず、また、遺構も検出されなかった。

p・mトレンチ G₂・G₁と同じ層序であるが、黒褐色土層は厚さ15~20cmと薄くなる。

以上の結果から、地山は、現状通り南西方向に傾斜しているが、東西方向では、西方程黒褐色土層が順次厚く堆積し、さらに、新たな堆積層が加わって、地山上に約40cmの土砂が堆積していることが知れる。南北方向では、逆に、南方の低地に行くに従い、黒褐色土層は薄くなる。

なお、上記トレンチの西及び南方では、西側で耕土下に厚い種の堆積が見られ、南方では粘質土となり、湧水が激しくなる。

しかし、いずれの層位中からも遺物は出土せず、わずかにgトレンチで堆積層の上面から土師器の細片を採取し得たにすぎない。また、各層位上面を旧地表面として2~3回にわたり遺構の追求を行ったが、後世のビット以外検出することができなかった。

qトレンチ このトレンチにおいても堆積層序は上記トレンチと異なることなく、地山と床土との間に20~30cmの黒褐色土層が見られる。ただ、ここでは、この黒褐色土層を切り込んで、径4.2m、深さ20~25cmの円形の土塹状の遺構を検出することができた。横断面は皿状で、塼内には若干の焼土とともに、土師器塊、小型甌、壺、須恵器の塊、蓋が含まれていた。

4 遺 物 (図5)

出土遺物は、表採品を除くと、qトレンチの土塼内出土のものが大半で、他にgトレンチより土師器の細片が出土しているが、図化できない。従って、qトレンチの土塼内出土遺物について以下に記述する。

イ. 土師器

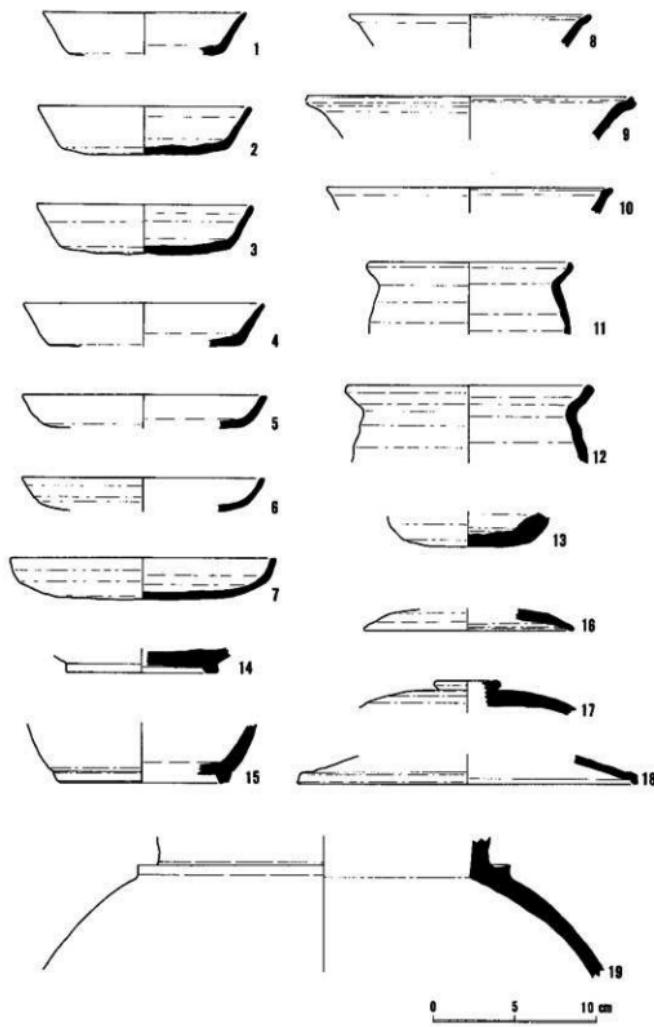


図4 御墓遺跡出土遺物実測図(1~18;トレンチQ 19;トレンチT)

塊（1～8） 2種類ある。I類（1～4）は、口径12.5～14.8cm、器高2.6～3.1cmを計り、底部から、不明瞭ながら後を取って屈曲させ、直線的に口縁部を立ち上らせたもの。口縁部は外方へ開き、その端部は丸く仕上げている。底部内面及び口縁部の内外面はナデで調整しているが、外底面の調整は粗い。黄灰色乃至灰白色を呈しており、胎土に細砂粒を含んでいる。II類（5～7）は、口径15.6～16.2cmと1類より大きいに対し、器高は2.1～2.6cmと低く、皿状品である。底部と口縁部との境界は不明瞭で、底部より二段にゆるやかに曲げて口縁部に移行させている。口縁端部が、狭い面取りを施されている点もI類と異なる。調整も外底面までナデがあり、I類より丁寧である。また、胎土は1類と同様であるが、色調は茶褐色を呈し、比較的硬質である。

壺（8～10） 壺の口縁部と思われるもので、8・9はともに口縁端部を外反させ、9は面を取る。10は壺の口縁部であろうか。

甕（11・12） くの字形の頸部と内側氣味に聞く口縁部を持つ。口縁端部は狭い面を取り、肥厚する。体部は、肩部の張りがなく、内外面に横方向の深い凹凸が残る。

ロ、須恵器

塊（14・15） ともに塊の高台部分の破片である。14は、横断面が扁長方形を呈し、15は、端面が凹む。

壺（16～18） 16は小型品で、小さく曲げて天井部と口縁部とを区別し、端部も小さく内側へ曲げているだけである。17は、天井部を丁寧にヘラ削りしており、扁平で大きなツマミが付く。18は、天井部と口縁部とを区別せず、端部のみ下方へ折り曲げている。

5 おわりに

今回の調査では、予想に反し、qトレンチで土壙一基を検出したのにとどまった。土壙が黒褐色土層を切り込んで掘り込まれているところから、他のトレンチでは開墾時に削平されたのであろうか。

おわりに当って、qトレンチの土壙の年代、性格等について記述しておきたい。

まず遺物の年代であるが、土師器碗II類は口縁部外傾指数が53～60で明らかに平安時代に入る。土師器の小型甕はその口縁部や体部表面に特徴を有するものであるが、類品が木ノ本町長野古墳群第1号墓から、当土壙出土の須恵器塊の2種の高台と同じ特徴を持つ2点の須恵器塊とともに出土している。長野1号墓からは、この他に須恵器の壺、壺が出土しており、器形上のセットは御墓遺跡と共通する。9世紀後半代に位置付けているが、類品を出土する当土壙もこれに近い時期を与えることができるとともに、当土壙の性格についても示唆しているものといえよう。

（田中勝弘）

II 坂田郡伊吹町神ノ木塚遺跡

1 はじめに（図1）

本報告は、坂田郡伊吹町村木地先における団体営ほ場整備工事に伴う神ノ木塚遺跡の発掘調査の成果である。調査は、国庫補助を受けて500,000円を費やし、滋賀県が財團法人 滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。

当遺跡は、ほ場整備工事の計画策定に当り、工事範囲内に、古来より神ノ木塚と呼称され、以前に発掘を受けた折り、多量の玉砂利が出土して経験ではないかと伝承されてきた箇所があるということで、県教育委員会に地元より届出のあったものである。現地調査の結果、古墳あるいは中近世の墳墓である可能性も考えられたので、事前に発掘調査を実施し、遺跡の性格を明確にし、保存のための資料を得ることとした。

調査及び整理業務には、滋賀県教育委員会 文化財保護課 技師 田中勝弘が指導に当り以下の参加者の協力を得て実施した。

田中秀和、田中聰一、石本好典、藤井益夫、北脇泰久、飯塚哲夫、児玉治美、菊池久美、青木千枝、宇田川正樹、多賀健次、大内裕子、岸本好弘。

なお、本報告書の本文は田中勝弘が執筆し、図面、図版等の作成については上記参加者の協同作業による。

2 調査の経過（図5）

当遺跡は、行政上坂田郡伊吹町村木字神ノ木塚にある。伊吹山系の形成する微高地にあり、標高152mに位置する。現状は、周囲の水田によって変形していて、12m×7m程の変五角形状に残り、最高50cm程の盛り上りを示している。調査は、十字形にトレントを設定し、封土の有無、以前に玉砂利を出した時の被掘塙を確認することから開始し、次いで、墓塙等の遺構等の有無を追求することとした。

3 調査の結果（図6・7）

設定したトレントは、長軸に沿った南北方向と、これに直交する東西方向の2本であるが、明治年間の被掘塙及び玉砂利が出土したと伝えるものに関連すると考えられる土塙を東西方向のトレントで確認した。

まず、東西方向のトレントにより断面土層を観察すると、上方30~50cm程は、後世に、周辺水田から出た礫石や瓦片、陶器片等が集積したものである。この下方には、厚さ10~20cm程の暗褐色土がある。東西約7mにわたって見られ、また、南北トレントでも12mにわたり確認できたので、盛り上り部分のほぼ全体に及んでいることが知れる。この土層の最高所は、水田耕土の上面レベルにほぼ等しく、また、土質も一樣であり、人為的に盛土されたものではないと考えられる。この下方で、灰白色の砂礫層の地山となる。地山面は、起伏はあるが、ほぼ、水田の地山レベルに等しい。

明治年間の被掘塙は、東西トレントのほぼ中央で確認した。トレントを拡張してその規模を確認した結果、直径1.6mの正円形のものであった。

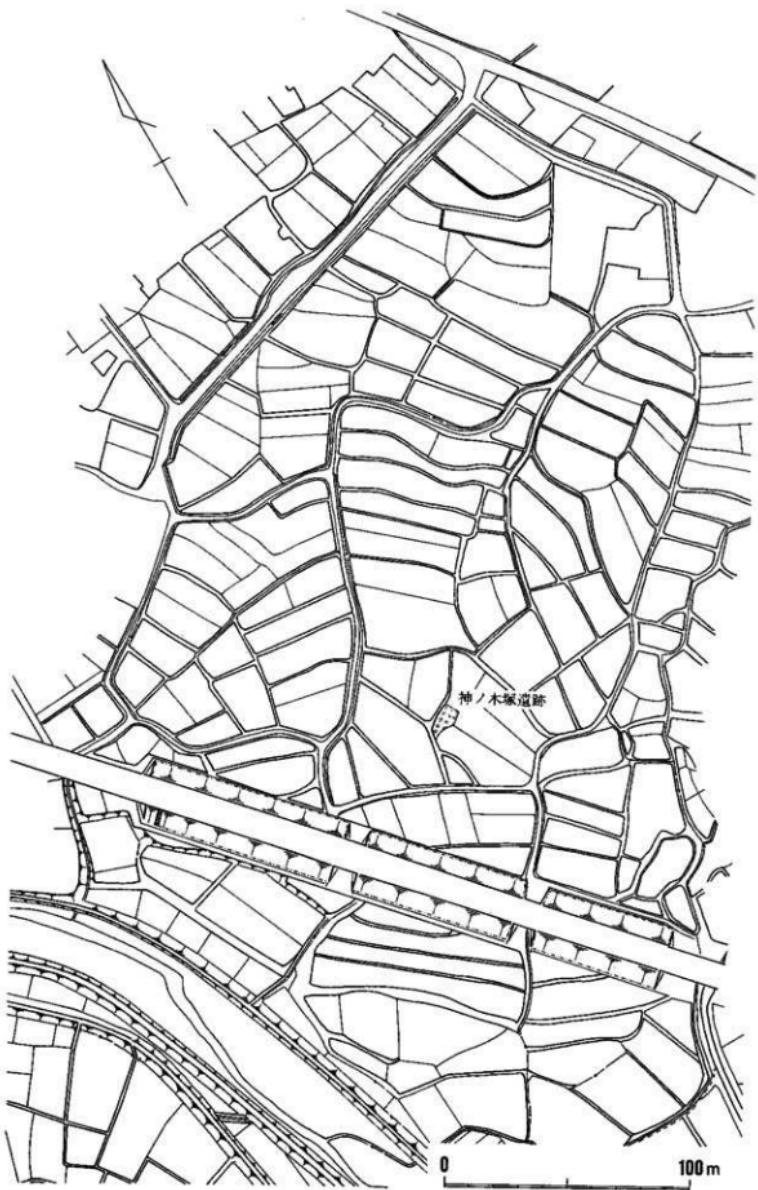


図5 神ノ木塚遺跡周辺地形図

土塙は、この被掘塙によりほとんど破壊されており、わずかに、トレンチ北壁の断面に残るのみであった。土塙は、暗褐色土層を切り込んで掘穿されており、上端幅1.1m、下端幅0.8m、深さ0.3~0.4mで、長さは、上端で40cm、下端で20cm程を度すのみであった。土塙内には二層にわたる堆積があり、特に下層は厚さが20cm程あり、やや扁平で、径5cm程の玉砂利が、ほぼ水平位に堆積していた。今回検出したこの土塙と明治年間の被掘塙との位置関係から、明治年間に出土したと伝える多量の玉砂利は、土塙内の下層で見られた扁平な玉砂利と一致する可能性が強い。従って、明治年間の玉砂利は土塙底に充填されていたのであり、また、土塙の規模は、塙底で0.2m×1.6m以内の長さを持った長方形ブロックのものであったと考えることができる。

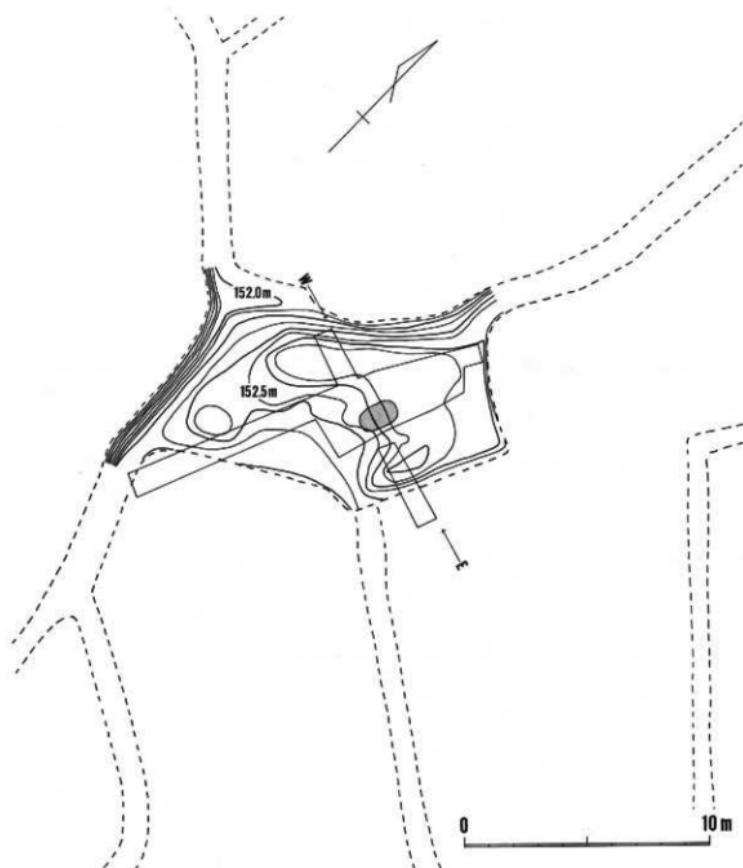


図6 神ノ木塙遺跡地形測量図(E-W; 図4の断面土層図の位置、スクリーントーン; 土塙)

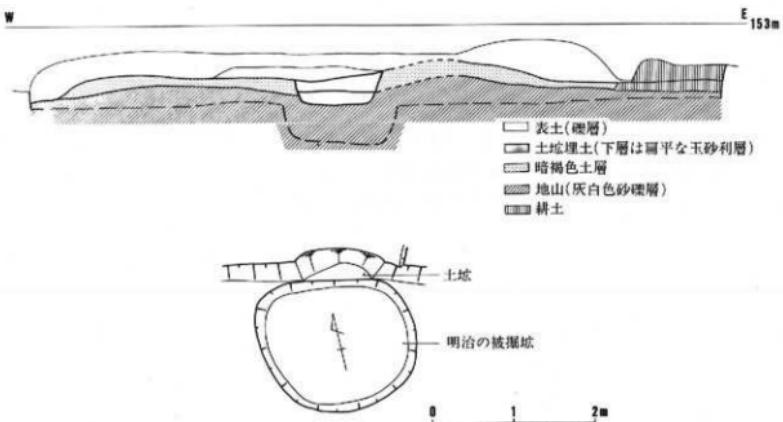


図7 神ノ木塚遺跡断面土層図(図4のE-W)及び土塙実測図

4 遺 物 (図8・9)



図8 神ノ木塚遺跡出土土師器皿

遺物は、最上層の礫層中から、軒瓦片、染付茶碗、摺鉢片、須恵器壺片等が少量出土しているが、これらは、後世に捨てられたものである。当遺跡の年代を決める手掛りとしては、明治年間の被掘跡内より出土した土師器の小皿片と五輪石片がある。いずれも、当遺跡の年代を決定するものではないが、明治年間の発掘の際には確実に存在したものであり、当遺跡の年代、性格を考える上に、最も有用な遺物といえよう。

土師器 小皿 (図8) 口縁部が段を持って屈曲し、水平に開く。口縁端部は欠失していて不明である。底部は平坦で、非常に浅い。復元すると、径10cm程、深さは1cm程度である。他に、図示できない程の細片があるが、同じ器形と思われるものが5点ある。このタイプの小皿は、高月町井口遺跡のF地区のピット内より出土したものに類似しており、高島郡高島町中ノ坊遺跡で13世紀代に比定されたものに近似する。

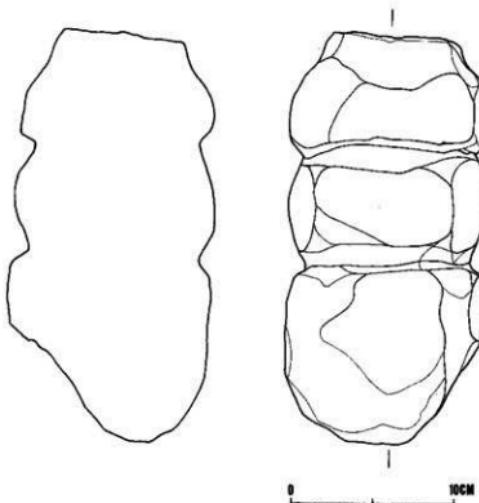


図9 神ノ木塚遺跡出土五輪塔

五輪塔（図9）　凝灰岩の一石で刻まれたもので、上部の空、風の二輪を欠く。最下段の地の部分は、部分的に面取りがされているが、大半が自然のまま残されている。一辺約12.5cmで、高さは10.8cmを計る。水の部分は、径12.5cm、高さ7.7cmで、隅丸の扁四角柱に近い形状をしている。火の笠の部分は、一边12cm、高さ7.7cmを残す。欠損しているが、笠部分のカーブはやや大きい。

5 おわりに

当遺跡は、長さ2m以内、上端幅1.1m、深さ0.4mの長方形の土塀で、横断面回字形を呈し、底に玉砂利を充填したものであることが知れる。出土遺物はなく、明治の被掘域内から土師器小皿と五輪塔が出土しているにすぎない。五輪塔は室町期のものと思われるが、土師器の小皿は、小片で詳細は不明だが、五輪塔より時期的にさかのぼるようであり、土塀の年代を決めるには不十分である。また、土塀の性格を決めるについても、五輪塔あるいは土師器の小皿が土塀に伴うものという条件付きで、墓跡ではないかと推察し得るにすぎない。本報告では、資料を提示するのにとどめ、年代、性格等については保留しておきたい。

(田中勝弘)

III 坂田郡米原町塚原古墳

1 はじめに

本書は、坂田郡米原町枝折地先における町営ほ場整備工事に伴う試掘調査の結果である。調査は、国庫補助事業として、500,000円を費やし、滋賀県が財團法人 滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。調査には、滋賀県教育委員会 文化財保護課 技師 田中勝弘が指導に当り、以下の参加者の協力を得て実施した。

田中秀和、田中聰一、石本好典、藤井益夫、北脇泰久、岸本好弘、飯塚哲夫、児玉治美、菊池久美、青木千枝、宇田川正樹、多賀健次、大内裕子。

本報告書の本文は田中勝弘が執筆し、図面、図版等の作成については上記参加者の協同作業による。

2 位置と環境（図1・10）

塚原古墳は、米原町枝折字塚原の段差の激しい水田中にある。標高125.3m程の位置にある。現在水田化されているが、本来、西方に舌状に張り出した台地であって、古墳はその基部付近に位置する。名勝醒ガ井渓谷を形成する丹生川に注ぎ込む枝折川が枝折の谷合を形成しており、古墳は、この谷合の入口に位置する。枝折川は、現在、古墳の立地する台地の北側を西流しているが、現地形を観察すると、台地の南側、山丘との間が一段低く、以前は台地の南側で丹生川に注いでいたようである。枝折の谷合は、低山丘をはさんで、その北側の中山道と並行しており、附近に北陸道との接続点があって、交通上は要所を占めている。遺跡の分布を見ると、丹生谷の最奥部に磨製石斧を出土した丹生遺跡があり、この狹隘な谷合が、早くから人の住むところとなっていたことが知れる。古墳については、現在知見に触れるものは、いずれも後期古墳であるが、丹生谷の東側山腹に、丹生古墳、秋葉古墳があり、丹生川と中山道とが交差する南西丘陵部に石淵山古墳群、丹生川をはさんだ東側丘陵上にも片山古墳群がある。中山道に沿った周辺で古墳の分布がほとんど知られておらず、従って、この丹生川に沿った谷間に集中することは、この地域が、歴史上重要な位置にあったことを示している。白鳳期にその創建時期が求められ、しかも、藤原宮跡と同じ軒瓦を出土する三大寺遺跡が、丹生川の東側、中山道の南側、すなわち、塚原古墳の北西部に隣接していることは、一層、このことを強調しているように思える。

3 調査の経過（図11）

現在、伝えられている古墳は一基のみで、畑地の一画に数個の巨石が露頭している。しかし、附近の水田を画する石垣を観察すると、周囲の石垣と異なり、巨石を用いているところが2カ所で見られた。従って、今回試掘調査を実施したものと含めて、少なくとも3基の存在が考えられたが、ほ場整備工事の時期と耕作時期との関係、これに伴う地元の要望等により、石垣石材の除去、耕作土以下（遺構面以下）の掘り下げが実施できなかつたため、石垣の巨石が古墳の石材（転用である場合も含めて）であるか否かを確認することはできなかった。

今回調査対象としたものは、石室の石材と思われるものが相当露頭し、原位置を保っているか否かも判然しない状況であった。そこで、調査はまず、墳丘を横断して南北方向に、幅1mのトレンチを設定し、表土及び封



図10 塚原古墳附近地形図

土の厚さを確認するとともに、石室石材の原位置にあるものを追求した。その結果、石室上方に封土が存在しなかったので、表土層を全面にわたって除去し、石室の全容を把握することとした。その結果、石室は西方に開口した横穴式石室で、露頭していた石材は、その大半が羨道及び玄室の天井石で、石室の北側へ倒壊した状況にあるものであった。側壁は、玄室が、天井石の移動によって最上段のものが玄室内に落ち込んでいたり、移動した天井石の下で北側へずれ込んでいたが、ほぼ完存に近い状況であった。玄室の奥壁は鏡石のみ残っていた。羨道は、天井石はすでに欠失している。入口は、水田の畔にかかり、北側は欠失しているが、南側では石垣の一部として遺存していた。

石室の平面における概要を把握した後、石室の高さを確認する予定であったが、玄室では、天井石や側壁の石

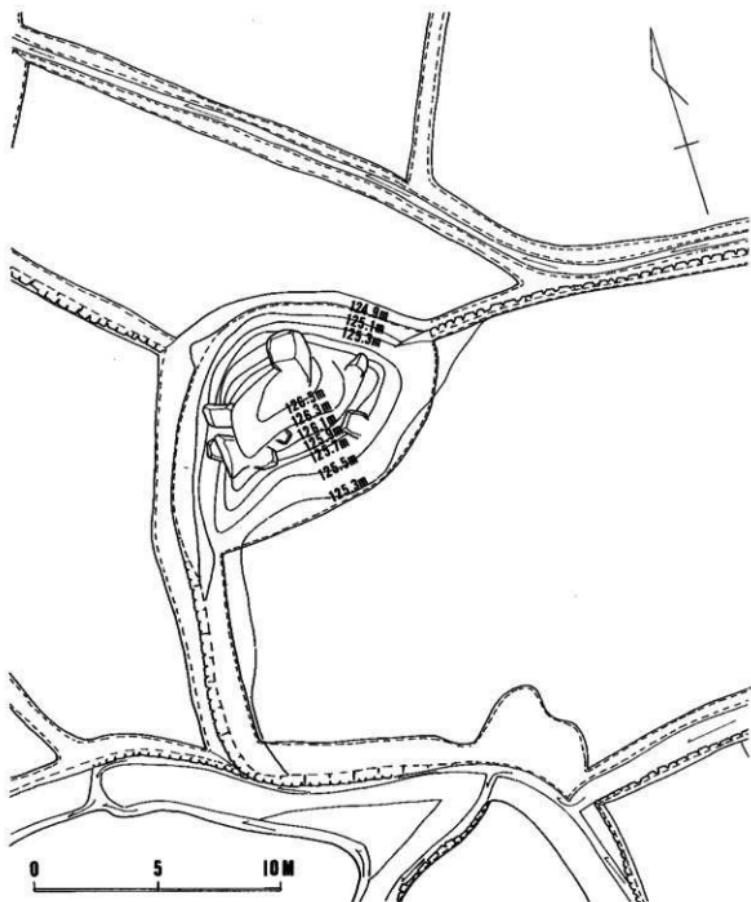


図11 塚原古墳地形測量図

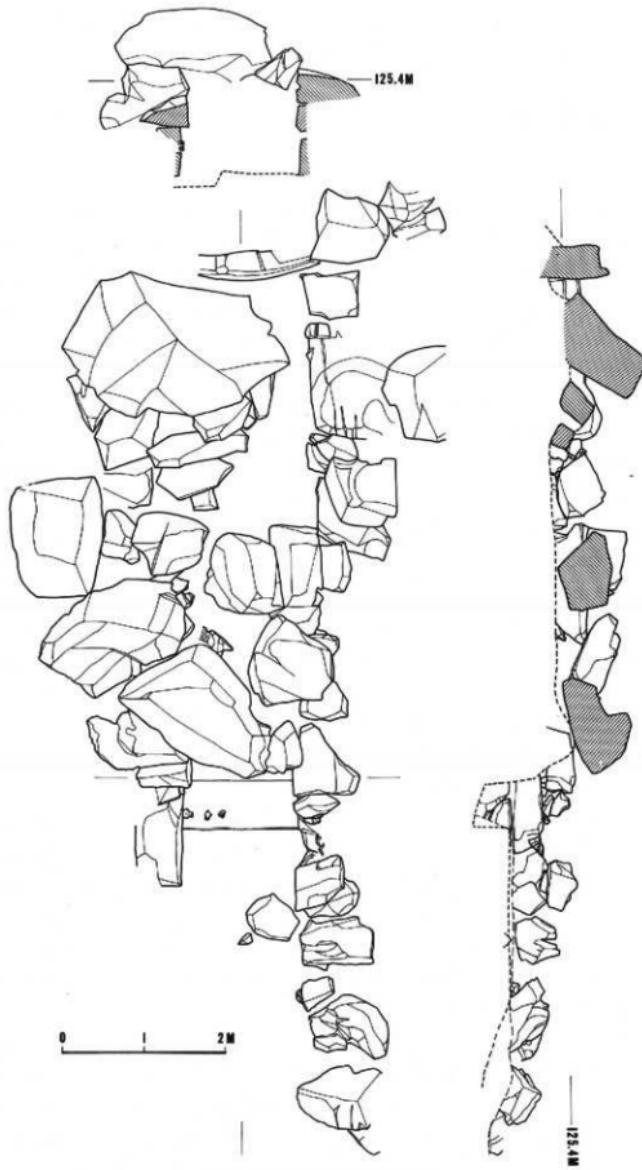


图12 塚原古墳横穴式石室実測図

材が下落していて、これらを除去しなければトレーナーを設定できなかったので、天井石が欠失している漢道部で幅50cmのトレーナーを設定し、床面を確認することとした。

4 調査の結果

イ. 墳丘（図11）

石室の北側畠地が、南側水田より1m近い落差があり、台地の南側傾斜面を利用して墳丘を造成していることが知れる。墳頂は、天井石が露頭し、倒壊していることからも知れるように、ほとんど流失している。側壁後方についても、現況から、流失、削平を受けている部分が多いと思われるが、今回の試掘調査では、調査後の耕作への影響を考慮して、深掘を避けたので、墳丘裾部とともに、確認できなかった。現状では、長径14m、短径9mのダ円形で、高さは1.2～1.6mを計る。

ロ. 石室（図12）

ほぼ東西に主軸を持ち、西に開口する。現存長10.8m、玄室の幅2m、長さは、玄門部に当ると思われる部分に天井石が遺存していて明確に測定できなかったが、約5.3m程である。漢道幅は1.5mである。ただし、これら数値は、側壁の最上段より下方2段目附近の計測値である。高さは、漢道のトレーナー部分で、現存1.5m、復元して2mを計る。

石室の石材は、附近で産出する石灰岩を使用し、側壁には、内面を面取りし、やや大型の割石を使用している。また、奥壁は、一枚石である。

ハ. 副葬品（図13・14）

漢道のトレーナー部分から、直口壺1点、高杯1点、甕片1点が出土している。いずれも須恵器である。

直口壺（図13-13） 器高11.1cmに対し、3cm程の口縁部が直立し、なで肩の体部に移行する。胴部最大径は10.2cmで、体部上方にある。体部の下方3分の1程はヘラで削り調整している。なお、口径は5.3cmで、暗青灰色の色調を呈し、砂粒を若干含んだ胎土で、仕上げは良好である。

高杯（図13-12） 短脚で、大きく外反し、端部を折り曲げて縁としている。脚の高さは5cm、端部径は10.4cmを計る。杯部は底部を残すのみであるが有蓋、無蓋は判然としない。

以上の2点は、漢道の床面から出土しており、古墳に伴うことは確実である。直口壺で、口縁部が体部に比べて短くなっている、高杯で、脚部が短く、透しを持たないという特徴は、ともに、京都府桃谷古墳出土須恵器を標準とする一形式に当る。湖北地方では、類品の出土を見ていないが、長浜市諸頭山2号墳に並行する時期のものと見てよい。

以上の古墳に関連するもの以外に、いわゆる表土層から、瓦、須恵器、土師器、山茶碗、陶器等が出土している。これらは、古墳周辺の水田から、後世に集積されたもので、その多くは、近隣する三大寺遺跡に関連するものであろう。以下に、その主なものを紹介しておく。

ニ. 須恵器（図13）

高杯（9） 大きく外反して開く脚部の破片である。三方に長方形の透しを持つ。透しの下端に、2条の浅い凹線がめぐる。これは古墳時代のもので、今回調査したもの以外に古墳の存在を推察せしめるものである。

広口壺（10） 肩部に張りのあることで口縁部は復元できない。胴部最大径は10.2cmで、体部高は6cmと復元できる。やはり古墳時代に入るものであろう。

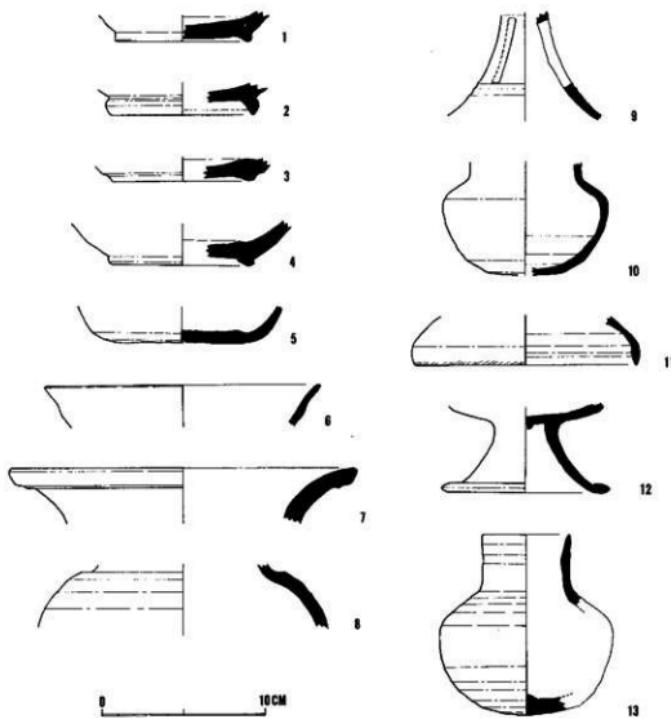


図13 塚原古墳出土遺物実測図(1)
(12・13: 漢造床面出土遺物、その他は表土層出土)

壇(5・6) 5は、平底で、口縁部との境界は稜を持たず丸く、底部中央部は切り離し後の調整は見られない。6は口縁部の破片。少し屈曲して開くようである。

1～4は山茶碗の高台部を残す破片である。

1・3は低い高台で、外面を垂直に、内面を彎曲させたもの。3には外底面に条切り底が残る。4は逆三角形の低い高台が付き、2は、逆に、高い高台が付く。

ホ。瓦(図14)

軒平瓦が2点出土している。1点(2)は、四重弧を型引きした簡単なもので、直線彫の無類形式である。瓦当端は、不明瞭だが三角形に仕上げているようである。軒丸瓦は出土していないが、醒ヶ井小学校に保管されているもので、藤原宮跡使用瓦と同じ複弁八葉軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセットの他に、単弁八葉の軒丸瓦がある。中房が小さく、1+8の珠文を配し、外辺に連珠がなく、周縁を高くし、二重の圓線をめぐらしている。岡崎市大末遺跡では、単弁の軒丸瓦と重弧文軒平瓦がセットをなしており、当古墳のものも、この2品がセットをなすと考えてよい。

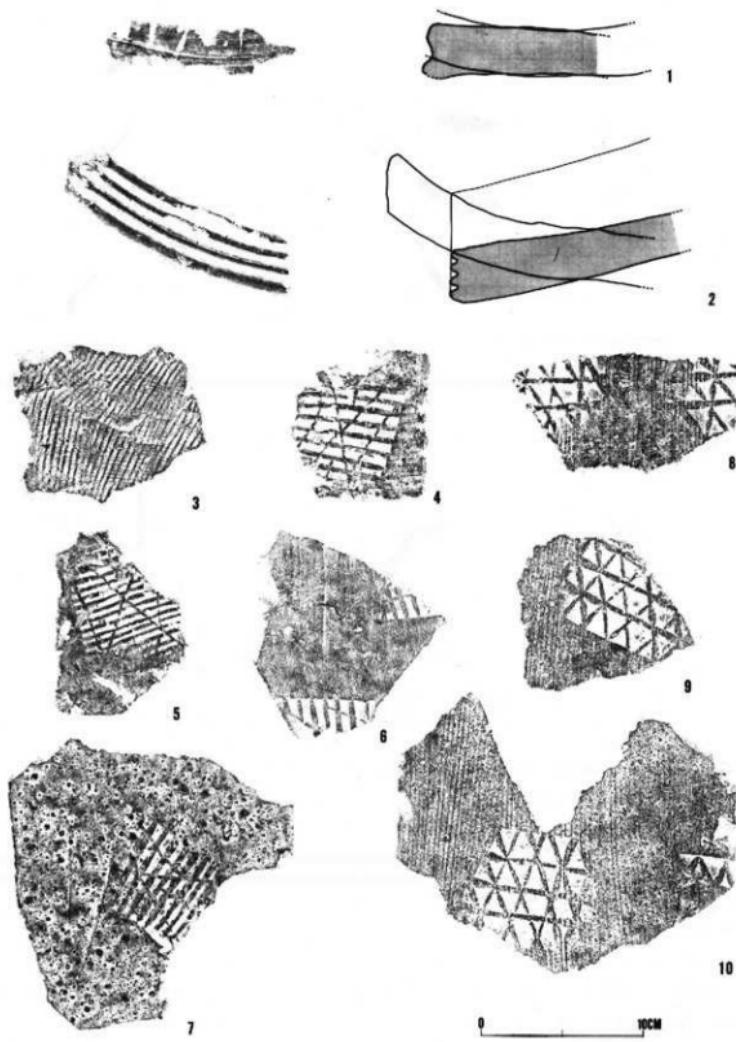


図14 塚原古墳出土遺物実測図及び拓影(2) (表2及出土)

他(1)は、二重弧で、やはり、直線彫の無彫形式である。

瓦類は、他に、平瓦、丸瓦が出土している。このうち平瓦には、硬質で須恵質のものと、白色を呈して、やや軟質のものがある。胎土も、前者に細砂粒が多く含まれ、後者には少ない。外表面の調整は、籠状の工具を用いて縦方向に削り上げており、木目の条痕が見られる。条痕を残すものと、さらに磨き上げて消しているものがあり、白色のもの、須恵質のそのいずれも調整上の区別はない。叩き痕には3種類がある。一つは須恵器風の叩き縮めの見られるものがある(3)。これは量的に少なく、今回の調査では1点のみである。他の2種類は縦の格子に斜方向の格子目を重ね合せたもの(8~10)と、格子目の縦方向を省略し、斜方向に、交叉するものを含めて数本の線を加えたもの(4~7)である。須恵器風の叩きは全面に施されているが後者の2種類は散発的である。また、後2者には、各々、2~3の叩き板があるようである。後2者のうち前者には籠状の条痕を残したものが多く、後者にはすり消したものが多い。

5 おわりに

当古墳の年代は、出土した須恵器類から、湖北地方においては諸頃山2号墳に並行した時期を埋葬期間の一時点に当てることができる。表土層から、これに近似した時期の須恵器類が出土しているが、石室の遺存状況から考えて、当古墳に伴うものとするより、周辺に、さらに、幾つかの古墳が存在していたと考えるべきで、水田を界する石垣に、石室側壁の石材を原位置で利用しているのではないかと思われる部分が2箇所で認められ、調査を進めていくことによって、塙原の字名が示すように、後期群集墳の存在が考えられるのである。

なお、表土層中より、平安時代を中心とする上器類や白鳳期の瓦類が出土しているが、これらは、周辺の水田より集積されたもので、近接する三大寺遺跡に関連するものと考えてよい。このことは、古墳の築成後、群集墳を取り込んだ状態で、新たに開発が実施されたことを示しており、その連続性から、群集墳の形成主体と寺院建立主体との連続的な変遷を把握する上において貴重な遺跡といえるのではなかろうか。

(田中勝弘)

IV 坂田郡米原町三大寺遺跡

1はじめに

本書は、坂田郡米原町枝折地先における町営土地区画整理事業に伴う試掘調査の結果である。調査は、国庫補助事業とし、2,500,000円を費やし、滋賀県が、財團法人 滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。発掘調査及び整理業務には、滋賀県教育委員会、文化財保護課 技師 田中勝弘が指導にあたり、以下の参加者の協力を得て実施した。

田中秀和、藤井益夫、北脇泰久、岸本好弘、飯塚哲次、児玉治美、宇田川正樹、菊池久美、青木千枝、多賀健次、大内裕子。

2位置と環境(図1)

今回の調査対象範囲は、行政上、坂田郡米原町枝折字塚原、悪根にあり、枝折川の南側に当る。この北西部に、町立醒ガ井小学校があるが、この小学校の校舎、講堂等の建築時に、相当量の古瓦の出土したことが伝えられ、その一部が小学校及び町教育委員会に保管されている。附近には、隨泉寺、福遊寺、多門寺等の寺院の存在が伝承されており、また、多数の寺院関連の地名が残っていて、遺跡名の三大寺もこの三寺院の伝承より名付けられたものと聞き及んでいる。三大寺遺跡の中心は、醒ガ井小学校附近にあるかと思われるが、瓦を含む遺物の散布範囲は、小学校の南側、枝折川を越して、塚原古墳の所在する附近にまで及んでおり、寺院の関連遺跡が相当広範囲に及んでいることが知れる。

三大寺遺跡からは、藤原宮跡使用瓦と同じ複弁八葉の軒丸瓦と扁行唐草の軒半瓦が出土しており、白鳳期にその創建時期を求めるものであり、宮跡との強い関連のあった寺院であることをうかがわしめるものである。また、周辺には、石瀬山古墳群、片山古墳群、塚原古墳群等後期古墳群があり、中山道沿いではこの附近に集中して分布する。白鳳期に寺院を建立させる条件を十分に有していた環境のほどがしのばれる地域である。

3調査の経過(図15)

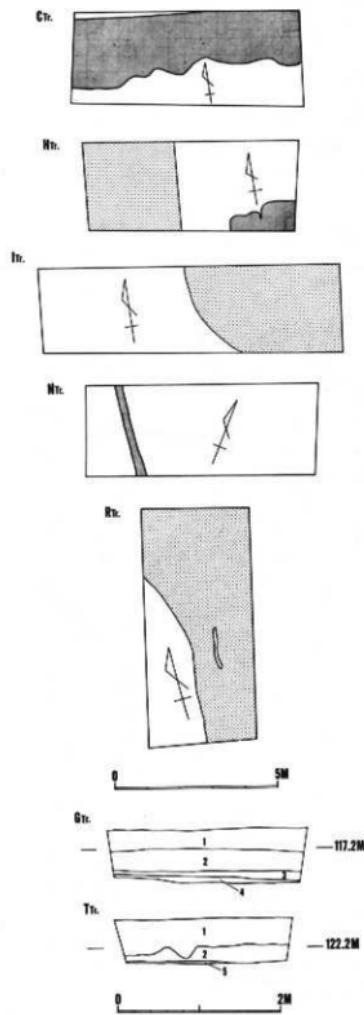
調査は、昭和55年12月から翌年3月まで、降雪時期を除いて実施したが、耕作時期との関係があり、耕作に影響のない範囲で試掘を実施することとなった。従って、表土層のみ除去し、遺物の包含層の存否、遺構の存否を確認するのにとどまり、包含層の厚さ、その下面での遺構の存否、遺構の性格の追求等を実施し得なかった。

調査はトレーンチ調査とし、地形的に最高所にあたる部分、すなわち、調査対象範囲を東西に縦断させ、さらに、これに直交して、南側に三列の水田を選び、各々に各1個所のトレーンチ、計25ヶ所のトレーンチを設定した。



図15 三大寺遺跡地形図及びトレンチ配置図

4 調査の結果(図16)



1. 耕土、2. 暗褐色土、3. 灰褐色土
4. 茶褐色土、5. 單黃褐色土

図16 三大寺遺跡トレンチ遺構測量図及び断面土層図

以下に、各トレンチでの状況を略述し、調査の結果とする。なお、Gトレンチ及びTトレンチでは一部深掘し、遺物包含層の厚さを確認した。

Aトレンチ 耕土除去後、直ちに茶褐色の地山に達する。遺構は検出できなかった。

Bトレンチ Aトレンチと同じ状況であった。

Cトレンチ Aトレンチと同じ層序であるが、ここでは、地山を切り込んで、ほぼ東西方向に走る溝を一条検出した。溝は幅1~1.6mで、東より程狭くなる。溝内堆積土中には瓦片等を含んでいた。

Dトレンチ Aトレンチと同じ。

Eトレンチ Aトレンチと同じ。

Fトレンチ Aトレンチと同じ。

Gトレンチ 耕土を除去すると、トレンチ全域で、暗茶褐色の遺物包含層を検出した。このトレンチでは、包含層の厚さを確認するため、深掘したが、その結果、暗茶褐色土は厚さ約30cmあり、統いて、厚さ10cm程の灰褐色土の堆積が見られた。灰褐色土層の下方で茶褐色の礫石の多い地山となる。遺物は、暗茶褐色土、灰茶褐色土の両層で出土した。瓦、須恵器、陶磁器等が含まれ、時期幅の大きい包含層である。

Hトレンチ トレンチの西半分、すなわち、自然地形の低位側に瓦等を含む黄褐色土の堆積が見られた。東半分は茶褐色の地山で、南東コーナーで方形及び円形の土塹が検出された。

Iトレンチ 東半分に、若干の土器片を含んだ茶褐色土が見られた。

Jトレンチ 耕土下は茶褐色の地山で、遺構は検出できなかった。

Kトレンチ トレンチ全面で遺物の包含層を確認している。

Pトレンチ 耕土下に、瓦片を含む暗茶褐色土の堆積が見られた。

Qトレンチ Pトレンチと同じ。

Rトレンチ Pトレンチと同じ。

Sトレーナー 耕土下は青灰色の粘土層の堆積があり、遺物、遺構等は検出できなかった。

Tトレーナー 耕土下に暗茶褐色土の堆積があり、土器片の堆積が見られた。深掘した結果、この暗褐色土は厚さ約20cmあり、さらに暗黄褐色土と続く。暗黄褐色土にも遺物の堆積が認められた。包含される遺物は、須恵器、土器器の他陶磁器が含まれ、時期幅の大きい包含層である。

Uトレーナー Tトレーナーと同じ。

Vトレーナー Tトレーナーと同じ。

Wトレーナー 暗褐色土の堆積が見られたが遺物等は皆無である。

Xトレーナー Wトレーナーと同じ。

Yトレーナー Wトレーナーと同じ。

以上のトレーナー調査の結果、遺跡は東西約200m、南北130mの範囲にあり、その南縁は旧河道状の粘土乃至砂質土の堆積があり、東縁は削平されているようであり、西縁は丹生川の氾濫原ともいいうる状況にあると考えられる。北縁は、遺物の散布状況から、枝折川を越して広がることが予想される。地形的には、U・V・Wトレーナー、X・Yトレーナー、S・Oトレーナーの位置は、他の個所より極端な落差があり、枝折川沿いもやや低く、従って、地形は、本来、西方や北寄りにのびる舌状の台地を形成していたのであって、遺跡は、この台地上に中心があったものと思われる。ただ、確認した包含層からは時期幅の大きい遺物が出土しており、遺跡の性格は複雑であろうことが予想される。

5 遺 物 (図17)

イ. 土器類

須恵器 蓋(1)は復元口径12.1cmで、高さ1.6cmの小形品である。平坦な天井部から屈折して口縁部に移行する。端部は三角形状に小さくつまみ出している。

灰釉陶器 2は、高さ1cmの高い高台部で、わずかに外彎している。3も1cmと高い高台を持つが、逆三角形状のものである。

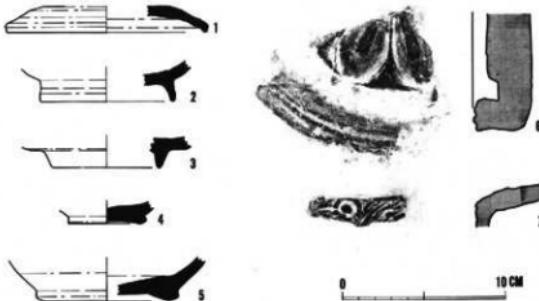


図17 三大寺遺跡出土遺物実測図及び撮影
(1・2・7; Ptr 3; Ttr. 4・5・6; Gtr)

山茶碗 5は幅の広い低い高台を持つ。器壁には厚味がある。4は円形の高台で、その周縁は粘土を貼り付けてやや高くし、輪状高台状にしている。径4.8cmの小さな高台である。5・6ともに灰白色を呈し、胎土に細砂粒を多く含んでいる。

以上は図化可能なもので、この他に、土師器、白磁、天目風磁器等が出土している。上記のものは平安時代～鎌倉時代のもので、さらに室町時代まで下る遺物を出土することになる。上器類では、現在のところ、奈良時代以前のもので、明瞭なものは出土していない。

ロ. 瓦類

単弁八葉軒丸瓦(6)が出土している。破片で全形を知ることができないが、町教委保管の同型のものを見ると、1+8の珠文を配した小さな中房を持ち、弁高はさほど高くないが、子弁は明瞭である。周縁は高く、圓線をめぐらせてている。

その他、平瓦、丸瓦等の破片が出土しているが、磨滅が激しく、これらを含む包含層の性格の一端を示しているようである。

6 おわりに

今回の調査では、包含層の掘り下げを実施できず、また、遺構の性格を明らかにするための発掘を実施し得なかつたが、溝状造構や遺物包含層を確認し、遺跡の広がりを知り得た。ほ場整備事業にあっては、事前に発掘調査を必要とする遺跡である。その結果によっては、白鳳期にその創建時期を求める事のできる三大寺遺跡との関係が明瞭になるものと思われる。

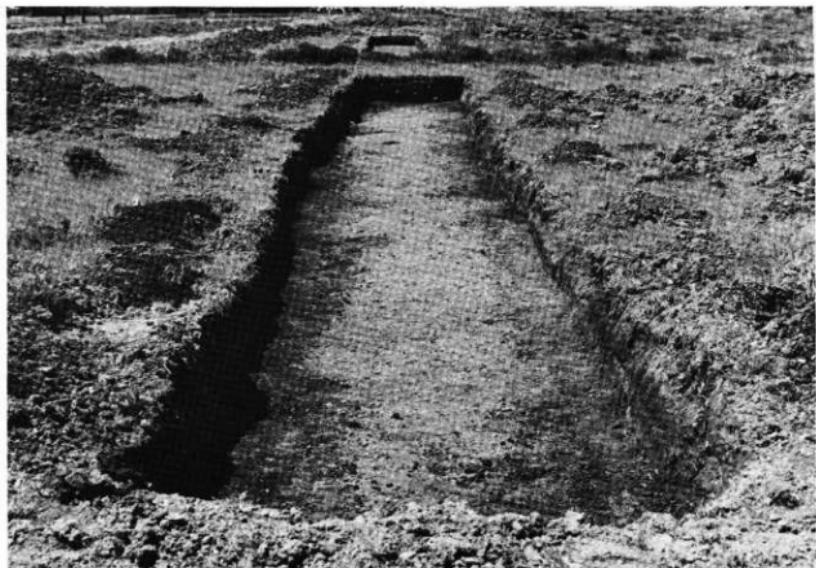
(田中勝弘)



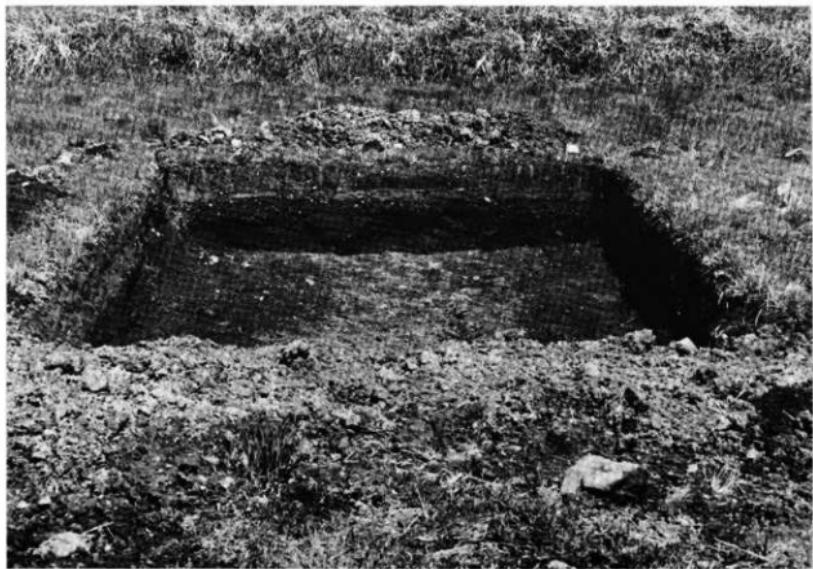
御墓遺跡遠景(東より)



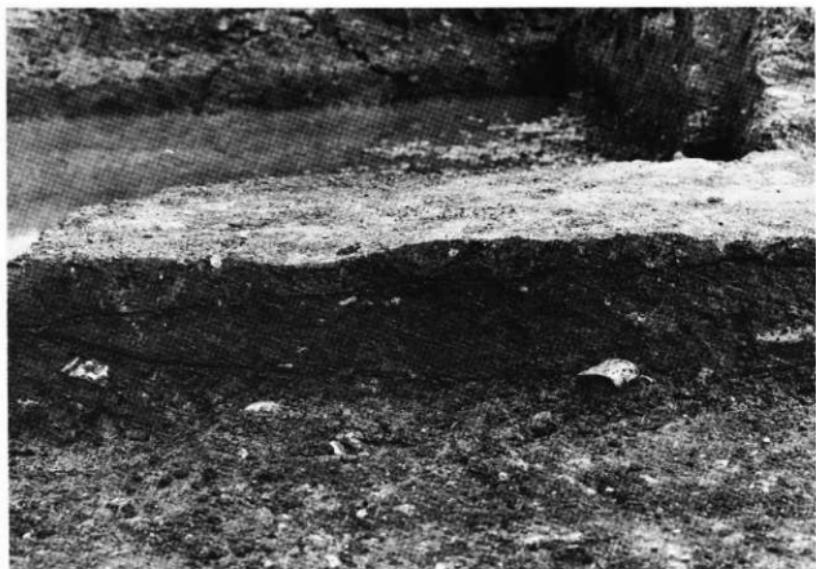
トレンチ g・f・c



トレンチP 〇



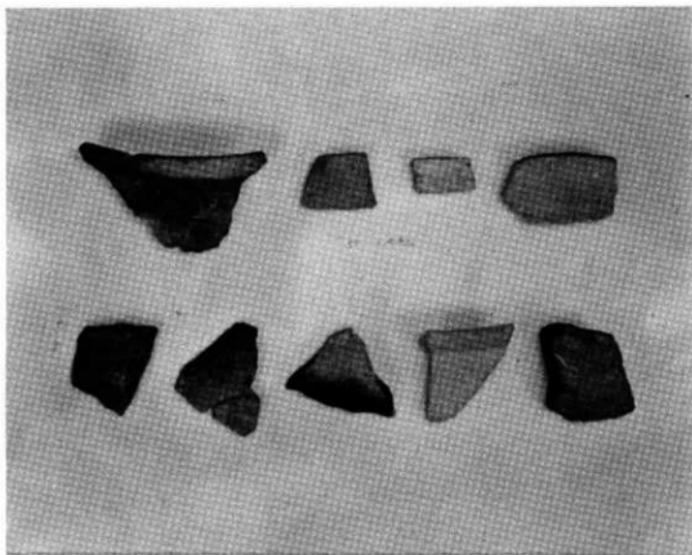
トレンチN 断面土層



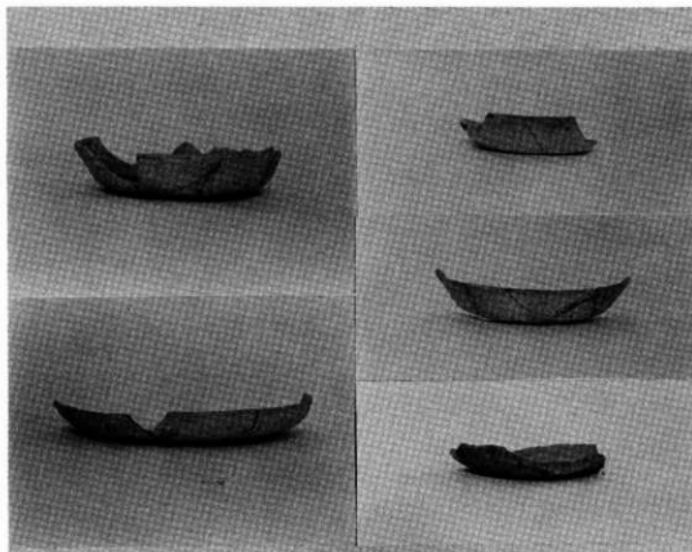
トレンチ4断面土層



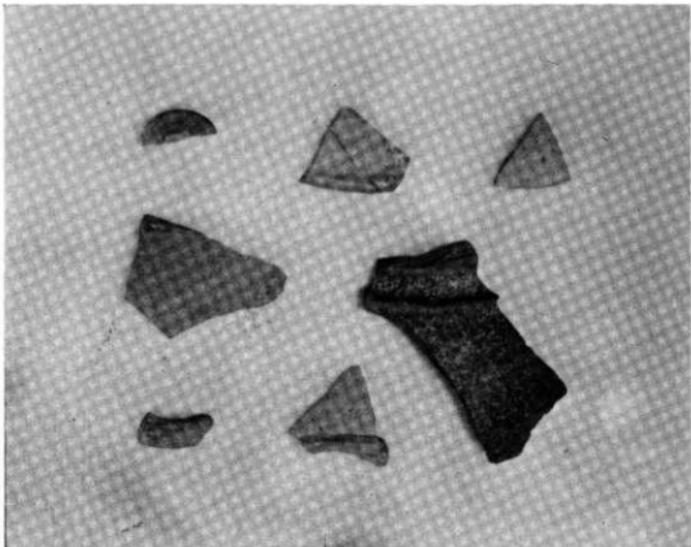
トレンチ4遺物(土師器皿)出土状態



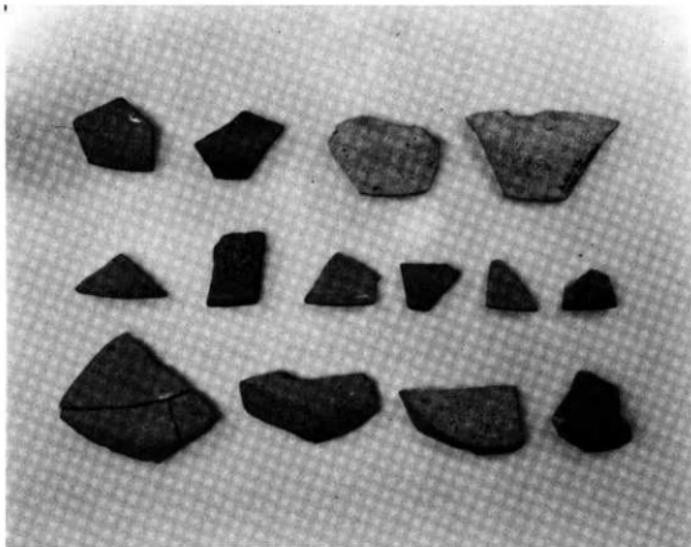
出土土師器(甕等)



出土土師器(杯類)



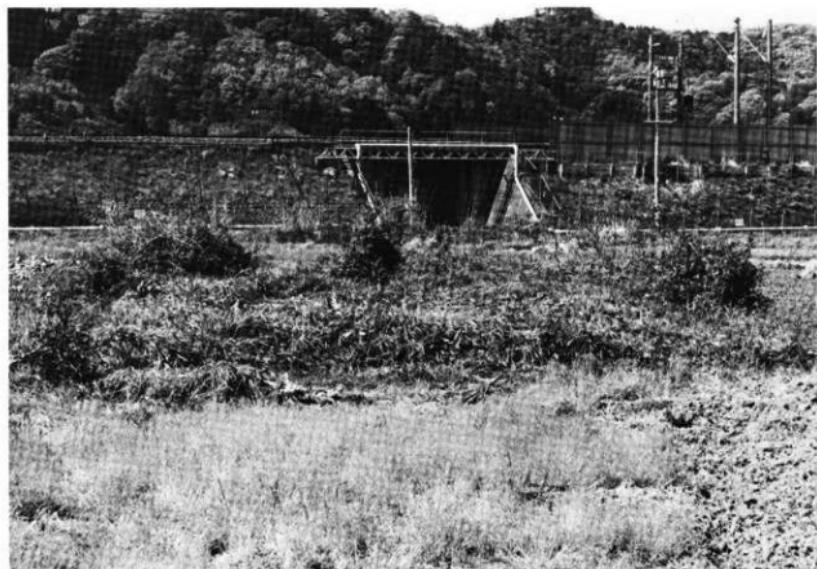
出土須恵器(杯・壺・壺等)



出土土師器(甕・杯等)



神ノ木塚遺跡遠景



神ノ木塚遺跡近景



発掘後全景



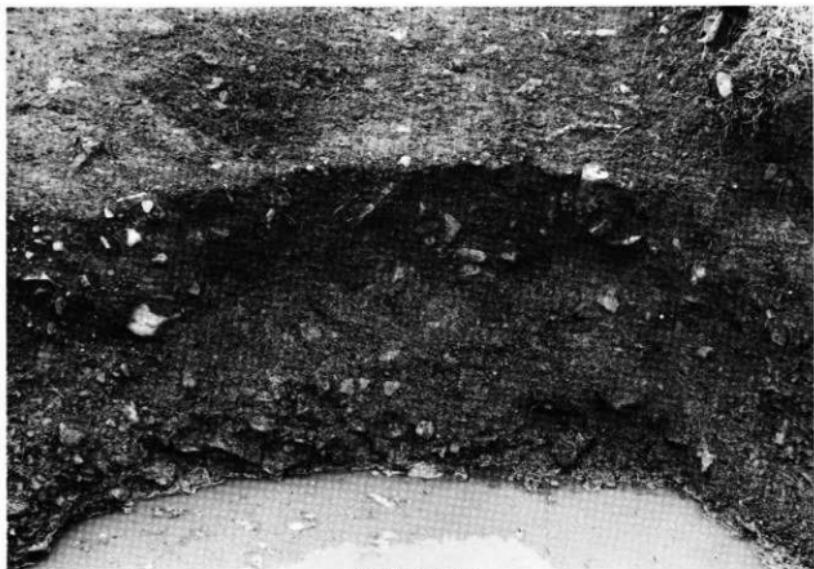
土地断面



土塚



土塚断面近景



玉砂利除去後の土塙



玉砂利除去後の土塙



塚原古墳遠景(南東より)



塚原古墳遠景(北西より)



石室近景(南西より)



石室近景(南東より)



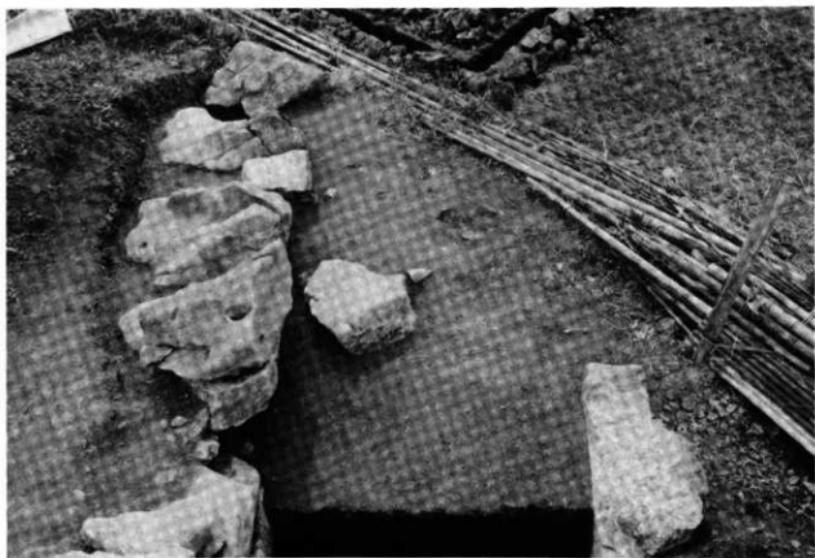
石室。玄門部



石室。玄室(東より)



石室。漢道東號



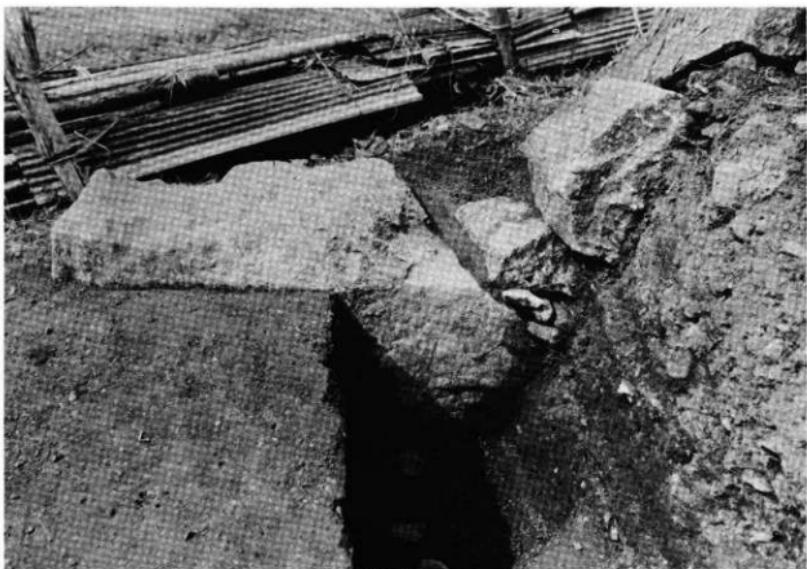
石室。漢道



石室。玄室の奥壁



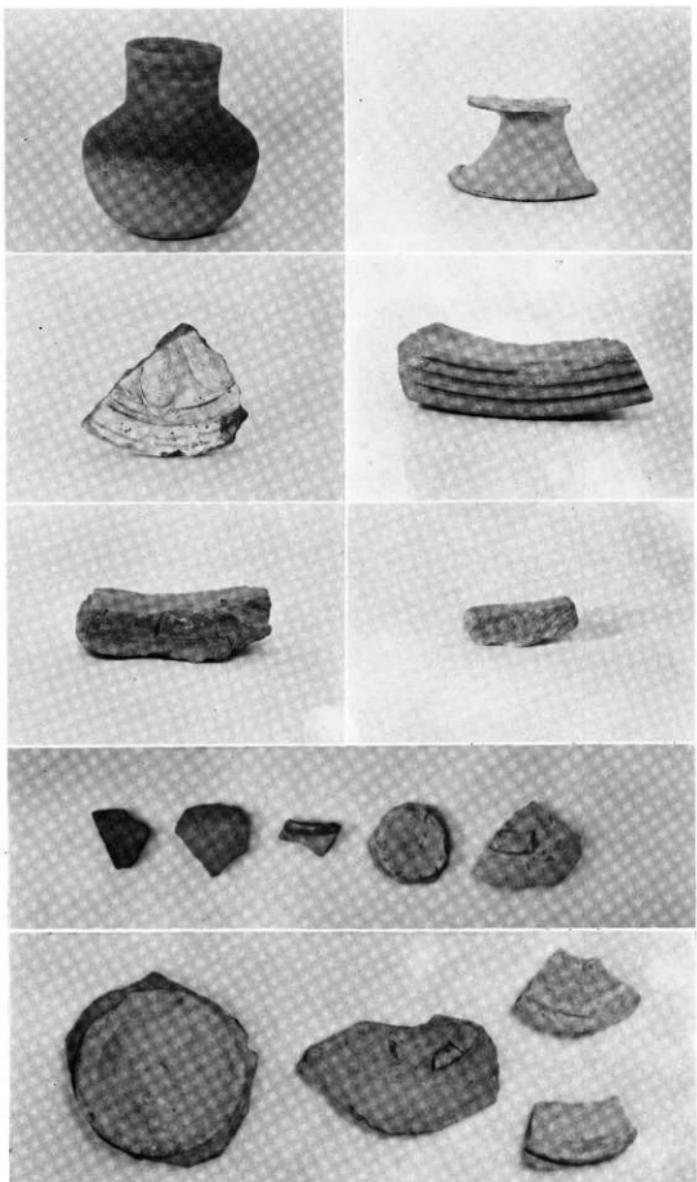
石室。玄室の東壁



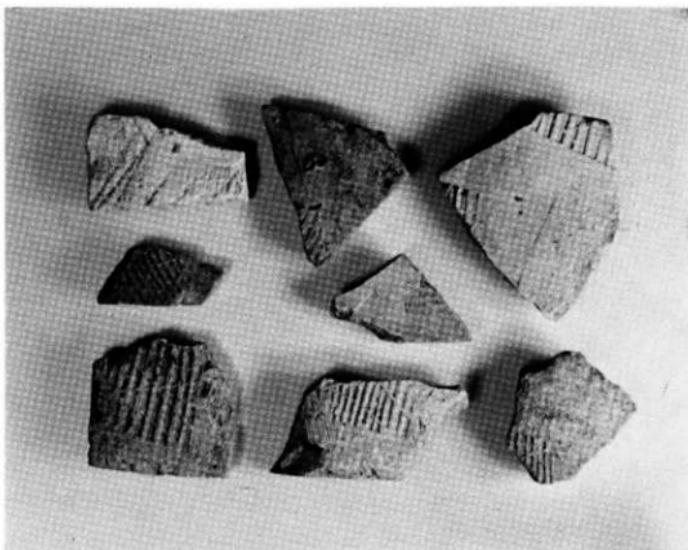
石室 漢道西號



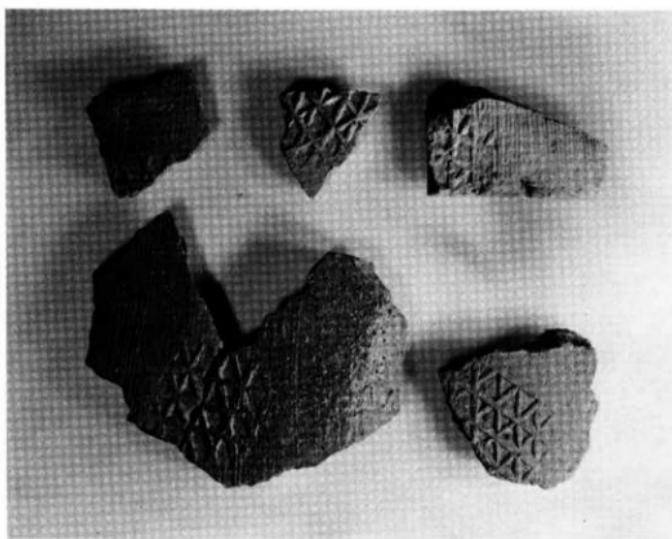
漢道部遺物出土狀態



塚原古墳出土須恵器(上段)、軒瓦(2段目及び3段目左)、三大寺遺跡出土瓦及び土器類



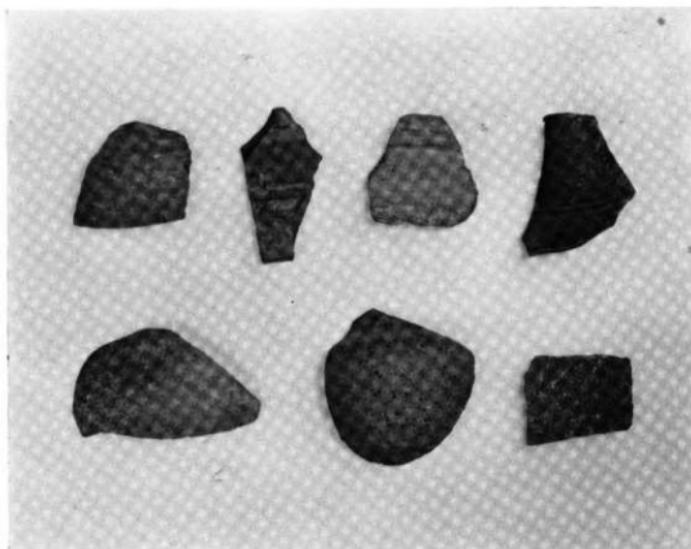
塚原古墳出土平瓦(タタキ痕A)



塚原古墳出土平瓦(タタキ痕B)



塚原古墳出土平瓦(タタキ瓦A・B・C)



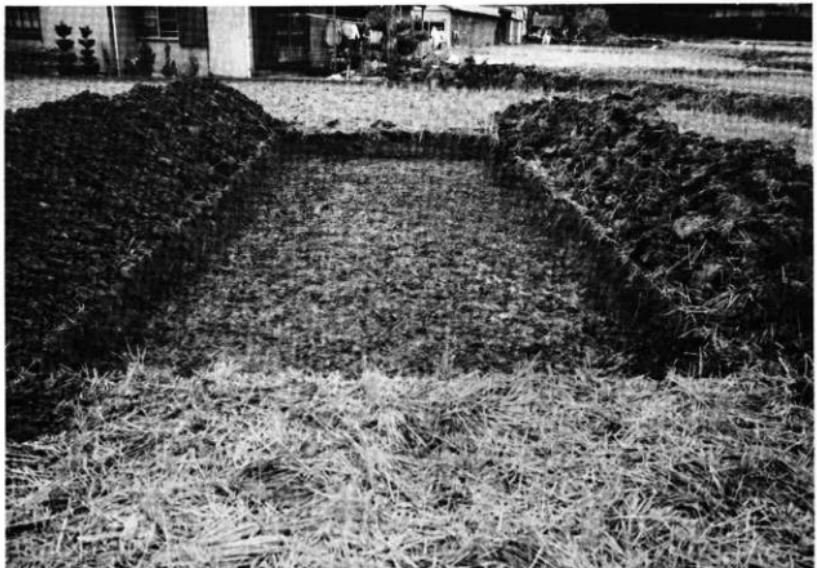
塚原古墳出土須恵器類



三大寺遺跡遠景(西より)



三大寺遺跡近景(西より)



B トレンチ



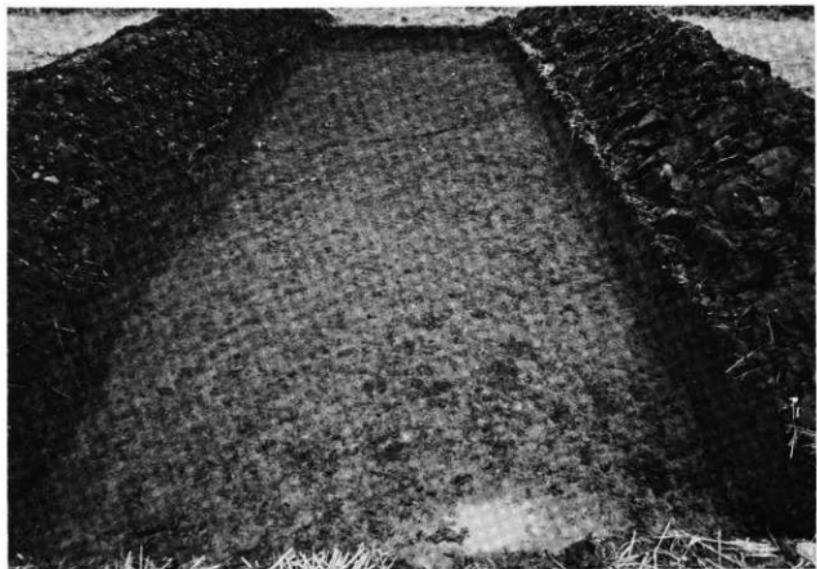
C トレンチ



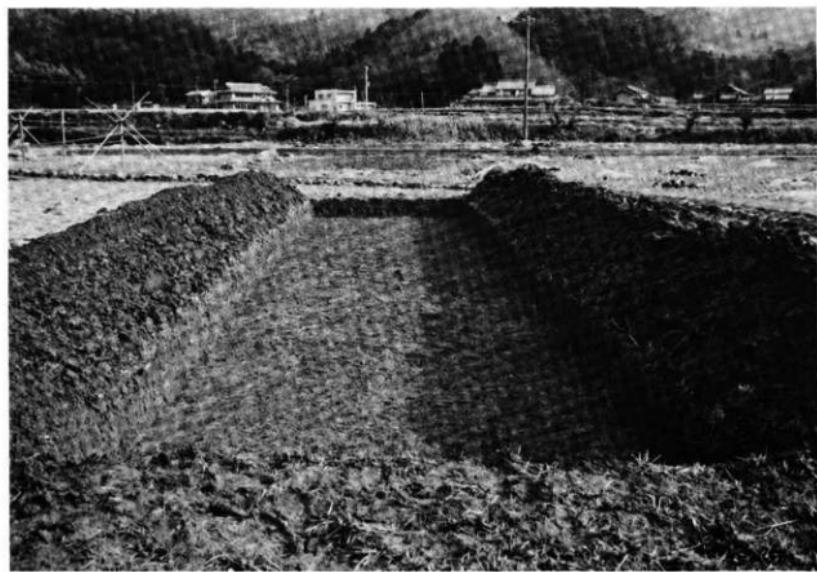
H トレンチ



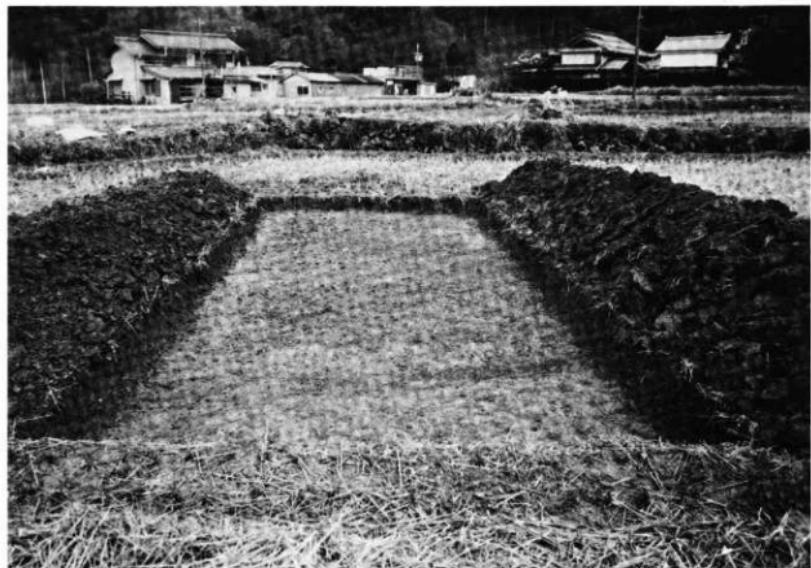
H トレンチ深掘断面土層



I トレンチ



J トレンチ



N トレンチ



P トレンチ

昭和56年3月

は場整備関係遺跡発掘調査報告書 VII-2

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 上田印刷有限公司

大津市京町一丁目2-17
TEL(0775)22-2831㈹